
君とあの丘まで

呉井実花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君とあの丘まで

【Nコード】

N4529B

【作者名】

呉井実花

【あらすじ】

いつも坂道で現れる彼は、私を助けてくれる。

ピリ、と冷たい空気が体をかすめる。前方から下に流れ込む空気は冷えきっていて、一際それを感じるのには手袋をしてるのに冷たい手だった。晒された足は既に赤く、スカートが当たる度に少し痛みを感じる。

これで毎日の登校が嫌いにならない学生がいるだろうか。いや、いない筈だ。誰もが丘の上にある学校を疎ましく思っているに違いない。市川夏菜もその一人だ。

夏菜は特に急ぎもせずに流れに任せ歩く。

周りの生徒達は遅刻だ、なんだと歩く速さを上げていった。

今更、遅いと冷めきった目で見ていた夏菜は後ろからくる衝撃に耐えきれずに前につんのめった。背中に確かに当たった何かは具体的に分からないが、対して固くない布の様な物だ。

大袈裟に背中を摩り、後ろを振り向くと自転車に乗った彼がいた。

「遅刻ですよ、先輩！」

夏菜を急かすその表情はどこか楽し気で本気で急いで無いのが窺えた。

自転車を降りて自分で投げた小さい鞆を取ると、乱暴に籠の中に戻す。彼はまた自転車に股がり後ろを見ながら顎をクイツと動かし、なかば誘導された夏菜は大人しく自転車の後ろに乗る。

吹き付ける風は一層、冷たく強くなるが夏菜には盾が前にいるので気になら無かった。

彼の背中にうなだれると少し背筋が真っ直ぐ伸びた様な気がした。

「ありがとう」

「……どういたしまして」

聞こえたのは少し照れた声だった。

「いつも、ありがとう。自転車さん」

「自転車かよ！」

彼が夏菜にツッコミを入れると自転車は少し揺れた。

小さく揺れる自転車も、頑張ってこいでる目の前の男子生徒も、その暖かい背中も夏菜には心地良かった。

訂正しよう。夏菜は実はそれほど登校が嫌いじゃない。

(後書き)

未熟な文章ですが感想、指摘などありましたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4529b/>

君とあの丘まで

2010年10月21日13時59分発行